

— ノート —

女子大生に対する禁煙教育後の“本音のアンケート”調査について

今本美幸 森下敏子

Female Students' Real Intentions About Smoking:
Results of a Survey Done After No Smoking Education

Miyuki IMAMOTO, Toshiko MORISHITA

要 旨

我々は、昨年、食物栄養学科の学生の喫煙状況について発表した。しかし、禁煙運動が厳しくなるにつれて、学生は本当の喫煙状況を話にくくなり、たとえ無記名のアンケートでも、紙面のみの調査では本音の話が聞き取りにくいことが分かった。そこで、学生とコミュニケーションがとれた卒業前の時期に本音のアンケートを実施したところ、入学時に行ったアンケートとは違った結果になった。

キーワード：女子学生の喫煙 female students' smoking
本音の調査 real intention 母親 mother

1. はじめに

2003年に受動喫煙防止法が制定され、本学でも2006年4月より敷地内禁煙が定められたほか、入学時オリエンテーションでは全学科対象に禁煙講演が行われるなど学生に対する喫煙防止活動が行われている。食物栄養学科では、1996年以来禁煙教育を実施しアンケートによる実態調査や意識調査を行い、その教育効果について今年の『神戸女子短期大学論攷』において発表した^{1~9)}。しかし、禁煙教育が強化されるほど本学学生の本音の姿は見えにくくなり、無記名のアンケートであっても紙面のみの調査では、本音の話しが聞き取りにくいことを知った。喫煙せざるを得ない「ニコチン中毒」状態の学生をフォローするためには、喫煙している学生が自らの喫煙について語る必要がある。たとえ無記名アンケートであっても、真実を語れる時期の選択と調査の目的を理解させることが必要であると考えた。

今回、学生個々人と十分なコミュニケーションが取れ、学内の評価が影響せず学生の進路がほぼ決まった卒業前の時期を調査日と設定した。また禁煙が意思だけでは困難なことや希望すれば様々のフォロー体制があることなど時間をかけて説明し、そのうえでアンケート調査を行っ

たところ実態調査の真の目的を学生が納得し、協力を得ることが出来た。この「本音のアンケート」により、入学時の調査とは異なる学生の実態がわずかながらも得ることが出来たので報告する。

2. 調査方法

2006年11月から12月にかけて、食物栄養学科2年次生167名を対象に、授業の中で「本音のアンケート」を実施した。本人の喫煙の有無と状況、学内外の学生喫煙状況、母親の喫煙の有無と状況、また学生や母親の好きなたばこの銘柄について調査を行った。喫煙の有無については、2005年4月に同じ学生185名を対象に行った入学時喫煙アンケートと比較した。

3. 結果

3.1 本音のアンケートと入学時アンケートの喫煙状況比較

学生の喫煙状況は、本音のアンケートでは6%（167名中8名）が現在喫煙をしており、過去喫煙者は2%（3名）であった（Fig.1）。一方、入学時アンケートでは、喫煙者1%（185人中2名）、過去喫煙者5%（10名）であった。喫煙者と過去喫煙者の合計数からみると、本音のアンケートは6.6%（167名中11名）、入学時アンケートは6.5%（185名中12名）と両者に差は見られないが、入学時は喫煙者が「過去喫煙者」と答えるケースが多く見られた。

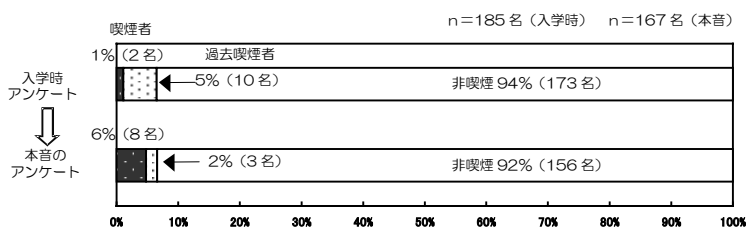


Fig.1 アンケートの違いによる学生の喫煙状況比較

また、母親の喫煙状況では、本音のアンケートの喫煙者は11%（167名中18名）であり、過去喫煙者は7%（12名）であった。一方、入学時アンケートの喫煙者は8%（15名）、過去喫煙者2%（4名）であった。母親の喫煙者と過去喫煙者の合計数は、本音のアンケートは18%（167名中30名）、入学時アンケートは10%（185名中19名）と本音のアンケートで約2倍に増加し、入学当時は母親の喫煙を答えないケースが多かった（Fig.2）。

3.2 いつから喫煙したか

現在喫煙している学生8名のうち、中学生から喫煙の始まった学生が4名と多く、次いで高校2名、大学2名であった（Fig.3）。

母親の喫煙者18名がいつから喫煙していたかについては、子供が生まれる前から喫煙してい

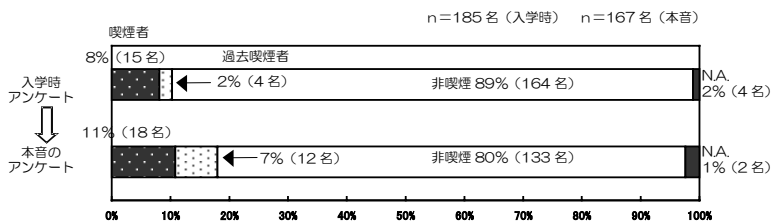


Fig.2 アンケートの違いによる母親の喫煙状況比較

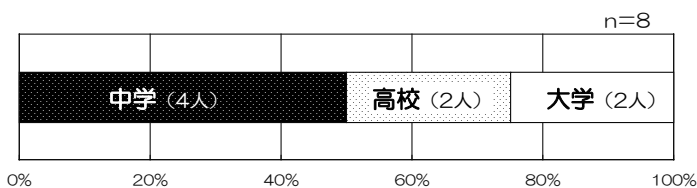


Fig.3 現在喫煙している学生は、いつから喫煙したか

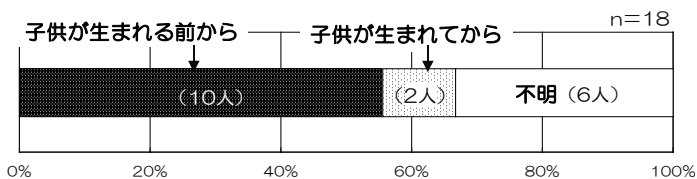


Fig.4 現在喫煙している母親は、いつから喫煙していたか

るケースが10名、ついで子供が生まれてからの喫煙者が2名、不明6名であった (Fig.4)。

3.3 どこで喫煙しているか

学生の喫煙場所はアルバイト先が最も多く、8名中7名がアルバイト先で喫煙していた。また、通学途中や自宅喫煙の学生も8名中5名と多かった。学校での喫煙は1名のみであった (Fig.5)。

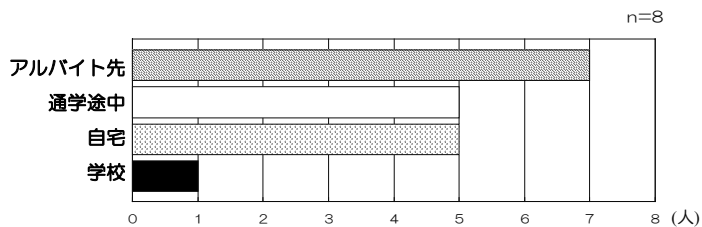


Fig.5 学生は、どこで喫煙するか (複数回答あり)

母親は、学生が確認する場所に限られるが、18名全員が自宅喫煙をしていた (Fig.6)。

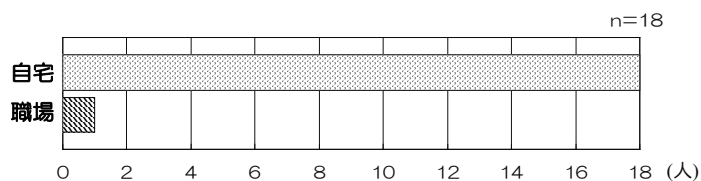


Fig.6 母親は、どこで喫煙するか (複数回答あり)

3.4 女子学生の喫煙開始時期と現在の喫煙本数

女子学生の喫煙開始時期別に喫煙本数を見てみると、中学生から喫煙している学生は4名で1日の喫煙本数が最高30本、最低5本であった。高校生から喫煙している学生は2名でどちらも喫煙本数は10本、大学生から喫煙している学生は2名で最高6本、最低4本であった。今回は、喫煙者が少なく有意差検定は出来なかったが、喫煙歴の長いほど喫煙本数の多い傾向が見られた (Fig.7 上)。

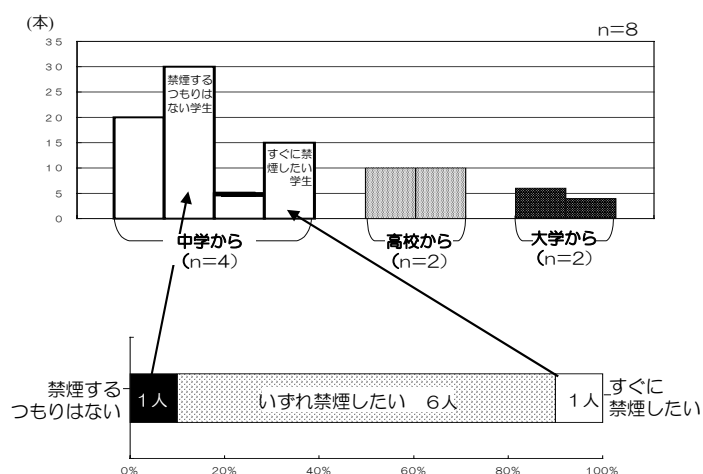


Fig.7 女子学生の喫煙開始時期と現在の喫煙本数 (上)、
喫煙女子学生は禁煙を望んでいるか (下)

3.5 喫煙女子学生は禁煙を望んでいるか

喫煙者8名中、1名が「すぐに禁煙したい」、6名が「いずれ禁煙したい」と回答した。両者合わせると88%の学生が禁煙を望んでいると考えられる。また、3.4の喫煙開始時期と喫煙本数と比較すると、中学から喫煙している1名は「すぐに禁煙したい」と答え、8名中、最も喫煙本数の多い学生1名が「禁煙する必要はない」と答えた (Fig.7 下)。

3.6 学生は敷地内外の喫煙を見たか

敷地内禁煙となった本学で、喫煙しない学生も含め学生の喫煙現場を見たかどうかについて

調査したところ、敷地内では、全体の58%（167名中97名）の学生が学生喫煙を見ていた。内訳は、トイレが最も多く77%（97名中75名）の学生が確認していた（Fig.8）。

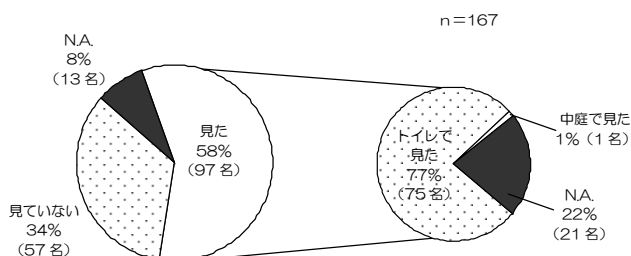


Fig.8 学生は敷地内喫煙を見たか

また、敷地外では70%（167名中116名）の学生が当学学生達の喫煙を認識していた。内訳は駅前コンビニ前を見た人が69%（116名中80名）と最も多く、ついで歩きタバコ12%（14名）、ポータライナーの駅、校門の外が各5%（6名）であった（Fig.9）。

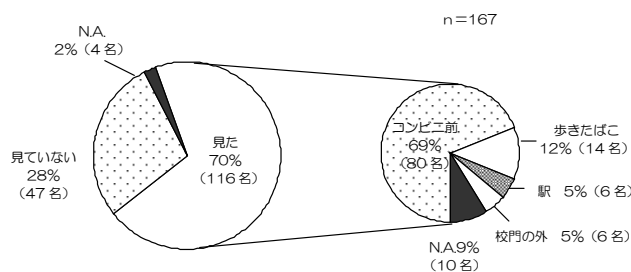


Fig.9 学生は敷地外の喫煙を見たか

4. 考察

女子学生への喫煙アンケートは、禁煙教育が進むにつれて無記名であっても一般の喫煙状況アンケートでは実態がつかめていないことが分かった。特に、喫煙する学生が過去喫煙と答えるなど、当時は禁煙教育講演後のアンケートであったためか、これから禁煙したいという意思が過去喫煙と答える理由になったとも考えられる。さらに、入学時に喫煙している学生が、短期大学在学中の2年間では禁煙に導かれてはいないこともこの結果から伺われた。

中学や高校からの喫煙が現在に至る喫煙歴の長い学生は、短期大学の禁煙教育が強化される一方で、「すぐに」または「いずれ禁煙したい」と希望していながらも禁煙に至らない、いわゆる「ニコチン中毒」に苦しみ、悩んでいると考えられる。これから喫煙する学生を増やさないためにも禁煙教育を強化し、喫煙の害をしっかりと認識させる一方で、既に「ニコチン中毒」状態で苦しむ学生の立場を理解し、学生の目線で禁煙を考えていくことも必要であるとする。

また、母親喫煙に関しては、一般のアンケートよりも本音のアンケート調査のほうで母親喫煙者数が増え、学生は母親の喫煙を隠す方向にあることが分かった。このことは、非喫煙の学生が母親の喫煙を快く思っていないことが推測され、最も禁煙教育の行い難い母親へ禁煙を進め

てくれる人材として期待される。

昨年、喫煙する母親のもとで育った学生はタバコの煙が気にならないことを発表した¹⁾が、今回、母親の喫煙は学生が生まれる前からが多く、また喫煙場所も自宅が最も多いことから、母親が喫煙する学生は幼い頃からの受動喫煙が避けられなかったと考えられる。このような母親の喫煙が与える子どもへの受動喫煙の影響^{2, 3, 4)}をもっと身近なこととして認識させ、将来、子どもに受動喫煙の被害を与える前に、特に女子学生に対し、具体的な禁煙治療をすすめることが必要だと考える。

学生の好きなタバコの銘柄調査では喫煙しない学生はたばこの名前が分からずイメージによる答えも多くあったが、ピンクやブルーのおしゃれでかわいらしいスリムなパッケージ、またメンソール系のさわやかな味の女性向のものが好まれていることが分かった。喫煙、非喫煙に係わらずこれらは好ましく思われており、喫煙者ターゲットとしてしっかり若い女性が狙われていることにも注意が肝要である。喫煙施策に負けない教育の必要性があると思われた。

神戸女子短期大学のあるポートアイランドは、今年度より他大学が増え多くの学生が行きかう町となった。町も整備され、道も広く美しくなった反面、現状では通学路の歩きたばこや駅前の薬局付近での喫煙が目立ち、非喫煙者の通行に支障をきたしている。当学では学生部を中心に駅やコンビニ前の喫煙場所を含めた学外の美化活動が現在行われており、隣にある神戸市立中央市民病院でも禁煙活動や美化活動が行われている。これらを、さらにポートアイランドの禁煙活動として盛んにすることが望まれる。

最後に、神戸市立中央市民病院の敷地内禁煙を実現し、当学でも禁煙教育をご指導くださった神戸市立中央市民病院参事、現西宮保健所長の藺潤先生と藺はじめクリニックの藺はじめ先生に深謝する。

今回のアンケートで好まれた女性向きタバコのいろいろ

<女子学生の好きな銘柄>



<母親の好きな銘柄>



引用文献

- 1) 今本美幸・森下敏子：女子大生に対する禁煙教育の取り組みについて，神戸女子短期大学論叢第52巻，81-87（2007）
- 2) <http://www.mhlw.go.jp/topics/tobacco/main.html>，～たばこと健康に関する情報ページ～厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室，（2006）
- 3) http://www.jatahq.org/tobacco_ngo/tobacco-ngo.htm，「喫煙と健康-喫煙と健康問題に関する報告

- 書], たばこと健康問題 NGO 協議会, (2006)
- 4) 平成15年4月30日厚生労働省健康局通知「受動喫煙防止対策について」, 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室
 - 5) 平成17年4月<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/seikatsu/pdf/ikk-a.pdf>, 新たな健診・保健指導と生活習慣病対策 標準的な健診・保健指導プログラム (確定版), 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室, 89-98 (2007)
 - 6) 渡辺文学: 「たばこ病」読本, 緑風出版, 45-50 (2000)
 - 7) 齊藤麗子: 「やめたい, やめさせたいときの禁煙サポート たばこがやめられる本」, 女子栄養大学出版部, 16-33 (2001)
 - 8) 加濃正人, 松崎道幸・渡辺文学: 「タバコ病辞典 吸う人も吸わない人も危ない」, 実践社, 318-359 (2004)
 - 9) 藺潤: 「モク殺モク視せず」, 神戸新聞総合出版センター (2001)